



平成27年 4月28日

小田小だより

〒236-0052 横浜市金沢区富岡西1丁目69番1号

<http://www-local.edu.city.yokohama.jp/sch/es/koda/>

平成27年 5月号

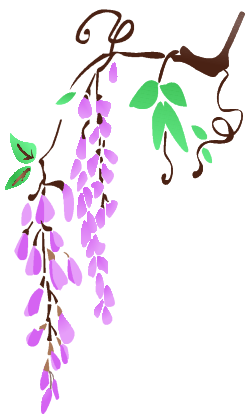
TEL 045(775)3011

横浜市立小田小学校

本当の優しさは？と問われ・・・

～こどもの日に思いを寄せながら～

校長 木村 昭雄



つつじやふじの花が咲き、爽やかな5月の風にこいのぼりが泳ぐ季節となりました。5月は、がむしゃらに頑張った4月の疲れが出てくる時期です。子どもたちは様々な要求をし、心の安定を求めてきます。優しく接することも大切ですが、それだけでは子どもは育ちません。そんな時、私は『おおきな木』（シェル・シルヴァスタイン作・村上春樹訳、あすなろ書房）という絵本を思い出します。その絵本は、アメリカの作家シェル・シルヴァスタインが1964年に出版し、半世紀近くにわたって、世界各地で読まれているロングセラーです。物語のあらすじをご紹介します。どのようにお感じになるのでしょうか？よろしかったらお考えください。

あるところに、大きなりんごの木がありました。そこに小さな少年がやってきて、葉っぱを集めたり、木登りをしたり、枝にぶら下がったり、りんごを食べたりして、いつも遊んでいました。その少年はその木が大好きでした。木も少年が大好きでした。

やがて少年は大きくなり、木と遊ぶことがなくなり、木は独りぼっちになることが多くなってしまいました。

ある日、少年は突然、木のところにやってきました。木はとても喜びました。木は「またここで遊びなさい」と言いましたが、青年になった少年は、「もう遊ぶ年じゃないよ。それよりお金がいるんだ」と言いました。「それなら、このりんごをとって、まちで売rinaさい」と木が言ったので、少年は、全部もぎ取って行ってしまいました。それでも木は幸せでした。

長い間、少年は姿を見せませんでした。久しぶりにやってきたかつての少年は、いい大人になっていました。少年は木に「家がほしい」と言い、その木の枝を全て切って持っていきました。それでも木は幸せでした。

さらに月日が流れ、かつての少年は中年になり、この木のところにやってきました。人生によいことがなかったようで、「遠くへ行きたいから船がほしい」と言いだしました。木は「私の幹を切って、船を造りなさい」と言ったので、少年は幹を切り倒しました。それでも木は幸せ・・・。

ずいぶん時間が流れ、かつての少年は、老人になっていました。そして、木のそばにやってきて「もう欲しいものはない。ただ、座って休む場所があればいい」と言ったので、切り株だけになった木は思いつき背伸びして自分を差し出しました。それでも木は幸せでした・・・。

という内容の絵本です。この絵本は1976年に本田錦一郎氏が、「与えて、さらに与えていくのは『犠牲』ではなく、『無償の愛』である」と和訳して出版しました。その後、2010年、作家の村上春樹氏が新しい和訳で再版し、上記の「それでも木は幸せ・・・。」部分に「幸せなんてなれませんよね」と言い切っています。確かに、この木を母だとすれば、「無償の愛」ということかもしれません。しかし、本当に与えるだけの優しさで子どもは幸せになれるのでしょうか？私にはどうしてもそうは思えないのです。なぜなら、原作者は年をとっていく男を最後まで“boy（坊や）”と呼び続けているのですから。

この絵本をしばらくの間、校長室前の廊下に置いておきます。ご来校の折りに是非お読みください。

